

擬態語の文法

星 野 和 子

Usage of Japanese Onomatopoeia in View of Syntactic Behavior

Kazuko HOSHINO

ABSTRACT

The Japanese GITAIGO is often regarded as a synonym of onomatopoeia. However, it is greatly different from onomatopoeia in that some GITAIGO words are generated from many scenes where there is no auditory information such as sound or voice. They can symbolically represent actions, natural phenomena, emotions, senses, and so forth.

Their syntactic behaviors are diversified. Some words can work as nouns and adjectival nouns as well as adverbs, while some others make verbs in combination with the “-suru” verb. Some words can generate adjectives, nouns, and verbs in combination with a prefix or a suffix. This paper aims at demonstrating the syntactic behaviors of Japanese GITAIGO by showing examples.

0. はじめに

擬態語は音象徴語ともオノマトペ (onomatopoeia) と呼ばれることがある。しかし、『現代英語学辞典』(文献1、p.609)では onomatopoeia は擬声(語)・擬音(語)とされ、擬態語はこれに含まれない。その定義は「自然現象の音にまねて語を形成する過程またはその語」であり、「擬声語においては音と意味とがある程度関連をもつ」とされている。また、「自然音から受ける感じを語に表現することを音象徴 (SOUND SYMBOLISM) と呼ぶが、これと擬声との間の差は、明瞭には区別しがたい」とも述べる。英語における onomatopoeia や sound symbolism と日本語の擬態語が根本的に異なるのは、音や声がないにもかかわらず、眼前に出現した動きや現象にある種の音を感じ、それ

を音で象徴的に表現することが行われる点である。つまり、英語の onomatopoeia や sound symbolism が「自然音から受ける感じを語に表現する」のとは逆の過程(音のない現象に音を感じる)で語が生成されることである。もちろん、音声から派生して象徴的に態を表したり、音や声とともに態をも表現する語も数多い。本稿は音声のみで他の意味を持たない擬音語・擬声語を除外した擬態語の用例を採集し、その用法を文法的に考察するものである。擬態語は短絡的に副詞とされることが多いが、文法的に考察すると副詞でないものも散見される。それらがどのような構文要素として使用されているか、頻度の多い語、複数の著者が使用している語を中心に考察する。

1. 考察の対象と方法

考察対象はすべて随筆である。それぞれの本文第1ページ目から始めて100語になるまで擬態語と擬態語から派生し合成されたと思われる語を抜き出し、計700語の用例を主たる考察対象とする。著者のプロフィールは、大久保氏と鳥居氏が学者、麻生氏が随筆家、松原氏と野田氏が冒険家、五木氏が作家、内田氏が元商業航空機の機長である。これらの中で使用されたものとは異なる用法がある場合には参考として他の印刷物から用例をとりその出典は本稿の末尾に記す。

それぞれの作品について使用頻度2以上の語を著者別に記したものが以下の表である。著者

名の直後の数字は延べ100語中の異なり語数、擬態語の後ろの数字はその語の使用度数である。下線を引いた語は擬態語からの派生による合成語である。

異なり語数は五木の51から野田・麻生の74まで幅がある。使用度数1の語が最も多いのは野田の(61)、以下、麻生(56)、鳥居(51)、大久保(45)、内田(44)、松原(39)で、最も少ないのは五木の(34)である。野田と五木ではほぼ倍の差がある。使用度数が2以上の擬態語の数は内田(21)、大久保・鳥居(19)、麻生(18)、五木・松原(17)、野田(13)である。

用例の出典

1. 大久保喬樹『風流のヒント』小学館ライ

出典別使用頻度（延べ100語中：使用頻度2以上のもの）

大久保(64)	麻生(74)	鳥居(70)	五木(51)	松原(56)	野田(74)	内田(65)
すっきり(10)	びたりと(4)	さっと(6)	ずっと(17)	ゆっくりト(17)	じっと(7)	しっかりト(5)
ずっと(4)	ひんやりト(4)	たっぷりト(5)	きちんと(6)	ごろごろ(5)	ゆっくりト(5)	ばらばら(5)
きらめく(3)	きちんと(3)	ほんのりト(4)	ふっと(5)	<u>ずぶぬれ(4)</u>	ずっと(4)	ちゃんと(4)
とっぷりト(3)	すーっと(3)	ころころト(3)	ふと(5)	ひっそりト(4)	びっしりと(4)	どんだん(4)
ひっそりト(3)	すっきり(3)	びっくり(3)	ひょっと(4)	ゆったりと(4)	しっかりト(3)	びっくり(4)
ほっと(3)	たっぷり(3)	あっさりト(2)	ほっと(4)	ぎっしりト(3)	ぐっと(2)	そーっと(3)
ぼんやり(3)	あっと(2)	かりっと(2)	じっと(3)	きっちりト(3)	ぐるぐるト(2)	ゆっくりト(3)
ゆっくりト(3)	うようよ(2)	ぎらぎらと(2)	すっきり(3)	ぼつんと(3)	そっと(2)	いらいら(2)
ゆったりと(3)	ぐーっと(2)	くつきりと(2)	ひっそりと(3)	うっすらと(2)	どんだん(2)	うんと(2)
うつらうつら(2)	さわさわト(2)	くねくねと(2)	ぎらりト(2)	<u>かんかん照り(2)</u>	とんとんと(2)	ぎくしゃく(2)
がらんと(2)	じっと(2)	こんもりと(2)	くつきりト(2)	ざわめき(2)	ぱくりと(2)	ぎょうっと(2)
ごろりと(2)	すっぱりト(2)	さっぱり(2)	ぐるっと(2)	しっかりト(2)	ばりばりと(2)	ぎりぎり(2)
さっぱりト(2)	ちゃんと(2)	じっと(2)	しゃんと(2)	ちゃんと(2)	ぶるぶるト(2)	ぐるっと(2)
そろそろ(2)	びしょびしょ(2)	せっせと(2)	すっと(2)	ばらばらと(2)		すっと(2)
ぞろぞろ(2)	ひたっと(2)	とろっと(2)	びしりと(2)	<u>びしょ濡れ(2)</u>		そろそろ(2)
たっぷり(2)	ひょいと(2)	びっしりト(2)	びったり(2)	びっしりト(2)		<u>とろみ(2)</u>
のんびり(2)	ふーわり(2)	ふと(2)	ゆっくりと(2)	ぼつんぼつんと(2)		はっきり(2)
はっきりト(2)	ふわり(2)	<u>ぶらさがる(2)</u>				びんと(2)
ぼつりぼつりと(2)		ゆっくり(2)				ぼーっと(2)
度数1の語						めちゃくちゃ(2)
45	56	51	34	39	61	44

注：擬態語に後接する小文字「ト」はその語が「ト」を付して使用された場合と、「ト」なしの単独で使用された場合とがあることを示す。

ブラリー、2001年2月

2. 麻生圭子『京町家暮らしの四季 極楽の
あまり風』文芸春秋、2001年7月
3. 鳥居フミ子『思い出の食彩』勉強出版、
2002年12月
4. 五木寛之『百寺巡礼』講談社、2003年9
月
5. 松原正毅『遊牧の世界』平凡社、2004年
11月
6. 野田知佑『カヌー犬・ガクの生涯』文春
文庫、2005年4月
7. 内田幹樹『機長からアナウンス』新潮文
庫、2005年4月

2. 考察と分析

擬態語は文法上の品詞名ではない。構文的には副詞としてだけでなく名詞や形容動詞としての振る舞いをするもの、「する」がついてサ変動詞化したと考えた方がよいものもある。『岩波国語辞典』（文献2）は版を重ねるたびに個々の語の意味記述改訂を繰り返したせいか用法の表記に統一性が欠けており、用法が「副」「トス自」「副・ダナノ」などさまざまである。単なる「副詞」とした語の例文に「する」がついているものもある。この場合は「する」が文の述語動詞で、擬態語が連用修飾成分ということになる。一般に、連用修飾成分は叙述内容をより詳しく説明するものであり、それがなくても文は成立するはずであるが、「する」を述語とする場合の擬態語はそれが欠けると文意が通らないものが多い。そのような語は副詞とするよりはサ変動詞の語幹と考えるほうが適切だと思われる。また、擬態語には次のような合成語も見られる。

- (1) 4拍全体に接頭辞をつけて新たな意味を添えるもの

こーざっぱり、こーちんまり

- (2) 2拍の語基に動詞あるいは接尾辞をつ

けて動詞・名詞を合成するもの

うろ一つく、ごった一返す、

ぶら一下がる、ぶら一下げる、

きら一めく、はた一めく、

ひら一めく、ゆら一めく、

だら一ける

ざわ一めき、とろ一み

- (3) 4拍全体あるいは2拍の語基に、名詞あるいは動詞連用形を付して名詞化するもの

いらいら一度、かんかん一照り、

ぺんぺん一草

がぶ一飲み、ごろ一寝、ずぶ一濡れ、

びしょ一濡れ、ほろ一酔い

- (4) その他 もみ一くちゃ、ぼつ一ねんと

2.1. 辞書概観

擬態語の品詞名や用法に関する記述は辞書によって異なる。たとえば、「ぎくしゃく」と「びしょびしょ」の2語について4種の小型国語辞典を参照すると次のようになっている。『岩波』と『新明解』の略語の意味は下記の通りであり、『明鏡』と『学研』の略記法も『岩波』『新明解』とはほぼ同じである。

『岩波』

トス自：語の末尾に「と」を付す用法と、「する」を付した自動詞用法がある。

副・ダナノ：副詞用法、形容動詞活用、連体修飾に「な」「の」どちらも使う。

『新明解』

副：副詞。

一な、一に：名詞のほかに連体形に「な」、連用形に「に」の用法がある。

一と：名詞のほかに、一般には連用形の用法だけのもの。

一する：名詞のほかにサ変動詞の用法がある。

○ぎくしゃく

- (1) 岩波国語辞典6版：〔トス自〕物と物と

の間がきしんで、なめらかに動かないさま。また、言語や動作がなめらかに運ばないさま。「—(と)した進行」「—した関係」

- (2)新明解国語辞典 6版：(副)一と、一する
○言葉・動作などが、なめらかでない様子。「—した歩き方」○円満な人間関係が損なわれて、しっくりいかなくなる様子。「あの事件以来、二人の間は一してきた／した関係」

- (3)明鏡国語辞典：〔副ト〕①(考えや感情などに食い違いがあって)平静な関係でなくなるさま。「事件を機に—した両国関係を修復したい」②動作がなめらかでないさま。「—(と)した足取りで歩く」

- (4)学研現代新国語辞典 改訂3版：《副・自サ》①言語・動作などがぎこちないようす。②物事がなめらかに進まないようす。「—(と)した人間関係に悩む」**類語**①②ぎくぎく。

『岩波』はサ変自動詞になること、『新明解』『明鏡』『学研』は副詞用法であることを記している。いずれも「と」を付して使用できるとしており、例文はどれも連体修飾の「—(と)したN(体言)」である。辞書に記すか否かは別として、実際には以下のようなサ変動詞述語として、また格要素である体言としての用例が朝日新聞にある。

- #1 最大派閥の小渕派との関係がぎくしゃくしかねない状況になっていた。(98. 12. 12)
#2 こうしなくちゃ、という気持ちはぎくしゃくを生む原因になる。(98. 4. 10)
#3 ひとつ間違うといのちのぎくしゃくがぜんぶここに現れる。(98. 10. 27)

○びしょびしょ

- (1)岩波国語辞典 6版：〔副・ダナノ〕水などにひどくぬれるさま。「雨で服が—になる」

- (2)新明解国語辞典 6版：—な、—に、—と
〔水・雨・汗などで〕水がぼたぼたと垂れるほどに濡れた△状態(ことを表す)。

- (3)明鏡国語辞典：〔副〕①〔ト〕雨が絶え間なく降るさま。「—(と)降る雨」
②〔ニ〕雨や水で全体がすっかりぬれてしまうさま。「汗で—になったシャツ」

- (4)学研現代新国語辞典 改訂3版：〔副〕
《「—と」の形も》①雨が絶えまなく降り続くようす。②《形動》ひどくぬれて水を含んでいるようす。「書類が—になった」

『岩波』と『学研』は副詞用法と形容動詞用法があることを、『明鏡』は副詞であって連用形に「と」と「に」が用いられることを示す。『岩波』は連体修飾に「な」だけでなく「の」も用いられることを記す。『新明解』は連体形に「な」、連用形に「に」と「と」があることを記す。どの辞書にも連体形と述語の例文はないが、今回調査した作品中には次の例がある。

- #4 びしょびしょに濡れた敷石(麻生 p. 33)
#5 幼女が服のまえをびしょびしょにしな
がらむさばるようにのんでいる。(松原 p. 119)
#6 ときには顔までびしょびしょです。(麻生 p. 32)

また、この語からは合成語「びしょ濡れ」が派生している。

- #7 チャドルのなかもびしょぬれになるだけだ。(松原 p. 168)
#8 あれれ、びしょ濡れだ、ということに

なる。(麻生 p. 32)

#5の「びしょびしょにする」と#7の「びしょ濡れになる」における「びしょびしょ」と「びしょ濡れ」は「する」や「なる」を述語として変化した結果の状態を表すものである。これらの「に」は副詞を作る接尾辞ではなく状態のありかを示す格助詞と見たほうがよい。これに対して「びしょびしょに濡れた敷石」の「びしょびしょ」は濡れ方の程度を表すものであり、単に「濡れた敷石」としても意味は通る。『明鏡』の「びしょびしょ(と)降る雨」では「びしょびしょ(と)」が雨の降り方をしめしている。このように擬態語には副詞と相体言の両方に用法がわたるものが少なからずある。

2.2.用例の考察

使用頻度が最も高いのは五木の「ずっと」と松原の「ゆっくりト」で、どちらも度数17である。「ずっと」は大久保と野田もそれぞれ4回ずつ使用している。「ゆっくりト」は野田が5回、大久保と内田が3回ずつ、鳥居と五木が2回ずつ使用している。この語は麻生以外の6名がそれぞれ複数回使用しているので基本的な語と言えよう。麻生は「ゆっくり」のかわりに一度ではあるが古風な「ゆるりと」を用いている。

2.2.1.「ずっと」の用法

1. 朝から空はずっと曇っている。(五木 p. 35)
2. 門の正面に塔があり、そのずっと右の奥に本堂が配置されている。(五木 p. 39)
3. 一人でずっと流されて行くのだ。(野田 p. 18)
4. 日本よりずっと日常的に夕涼みを楽しむ。(大久保 p. 44)

1は時間的長さを、2は空間的距離を表す用法である。3は時間と距離の両方を表し、4は「～よりずっと」の形で二者を比較した際の差の大きさを表す。この四つ以外の用法はない。

どれも「ずっと」を省いても文として成立する。したがってこれは副詞としてよい語である。特に3は程度副詞として分類できる用法である。「ずっと」の係り先は1と3が動詞(V)、2と4が体言(N:形容動詞も含む)である。このことから擬態語副詞が修飾するのは用言だけでなく体言にも及ぶことが検証される。1は動詞を修飾しているがその形は[Vテイル]で変化結果の残存状態を表す形式になっている。

2.2.2.「ゆっくりト」の用法

1. 夕暮れの雨に濡れた誘導路をゆっくりと動き出した。(内田 p. 158)
2. 一里半の道をやすまずにゆっくり歩いて帰るのである。(鳥居 p. 28)
3. ゆっくりとした動作だが、ひとときも身をやすめることがない。(松原 p. 27)
4. ゆっくりした調子のかげ声をかけながらおってゆく。(松原 p. 57)
5. つぎの露营地が昨日ほどおくはないので、準備もゆっくりだ。(松原 p. 132)
6. 表から、奥の別世界までゆるりと味おうていただく (麻生 p. 21)

「ゆっくり」は末尾に「と」をつけてもつけなくても述語を従えることが出来る。1の「ゆっくりと動き出した」、2の「ゆっくり歩いて帰る」の「ゆっくり」はどちらも移動の速度を表す。これらは「誘導路を動き出した」「一里半の道をやすまずに歩いて帰る」のように「ゆっくり」がなくても構文的には問題がない。したがってこの用法の「ゆっくり」は副詞である。3の「ゆっくりとした動作」、4の「ゆっくりした調子」のような「する」を従えた連体修飾用法では「する」を独立した本動詞と見ることは出来ない。この場合は〔擬態語+する〕を一つのサ変動詞とするのが妥当である。副詞用法と同様に「と」の有無は構文上の問題とはならない。5は「ゆっくり」が体言述語であり、『岩波』風なら「ダ」

と記す用法になるはずであるが、現行は「副」である。『新明解』は「副一と、一する」となっている。麻生は同じ意味で「ゆるりと」を用いている。これは副詞用法になっているがサ変動詞化が可能であろう。

次に使用度数が多いのは大久保の「すっかり」で度数10である。この語は麻生も3回使用している。その次は「じっと」で野田が7回、五木が3回、麻生と鳥居が2回ずつ使用している。鳥居の「さっと」と五木の「きちんと」はそれぞれ使用度数6である。「さっと」は他に使用者がいないが、麻生は同様の意味で「さき一と」を用いている。「きちんと」は麻生が3回、類語の「きちっと」を鳥居と松原がそれぞれ1回ずつ使用している。類語に「きっちり」があり野田と内田が1回ずつ使用している。

使用度数が5の語には鳥居の「たっぷりト」、五木の「ふっと」「ふと」、松原の「ごろごろ」、内田の「しっかりト」「ばらばら」がある。「たっぷり」は外に麻生が3回、大久保が2回、野田と内田が1回ずつ使用している。「ふっと」「ふと」は著者の思い入れの違いで促音化したりしなかったりしているようで、ほとんど同じ意味を表すと思われる。外に鳥居が「ふと」を2回使用している。「ごろごろ」は鳥居が1回、類語の「ごろりと」を大久保が2回、「ころころ」を鳥居が3回、合成語の「ごろ寝」を松原が1回使用している。

2.2.3.「すっかり」の用法

1. 今はすっかり住宅地になってしまったが、(大久保 p. 14)
2. 眼光の鋭い方なのですが、すっかり好々爺といった雰囲気です。(麻生 p. 16)
3. すっかりくつろいで腰を落ち着いた。(大久保 p. 25)
4. 下町に行くこともまれになって以来、すっかり忘れていたが、(大久保 p. 44)

5. ついさっきまで吹いていた風もすっかりやんだ。(五木 p. 77)

6. 外に出てくるときは身も心もすっかり清められて、真っ白になっている (五木 p. 70)

「すっかり」は体言も動詞も修飾する。1の「すっかり住宅地」と2の「すっかり好々爺」はどちらも「すっかり」が体言を修飾しているが、この体言は具体物ではなく情態を表す。「すっかり」が修飾する3の「くつろぐ」、4の「忘れる」、5の「やむ」、6の「清められる」は状態変化を表す動詞であり、その変化の程度が「すっかり」で表現されていることになる。この語はいわゆる程度副詞なので、文の必須要素とはならない。

2.2.4.「じっと」の用法

1. 岩ノ下や岸の穴にじっとしているコイ(野田 p. 10)
2. ホタルはじっとしている (麻生 p. 48)
3. 永久にそこにじっとしているわけではない (五木 p. 75)
4. 目を閉じてしばらくじっと座ってみた。(五木 p. 92)
5. 濃紫色の小さな実を宝石を見るような気持でじっとみつめていたのだった。(鳥居 p. 56)
6. 僕がカヌーを漕ぎ出す時、岸でほくをじっと見つめた。(野田 p. 20)
7. こちらもじっと眺めていたのですが、(麻生 p. 48)

「じっと」は動きのないことを表す。1～3はいずれもサ変動詞化しており、「じっとする」で1語になっていると見た方がよい。4～7は動詞を修飾しているが、「座る」は身体の動きがないこと、「見る」「見つめる」「眺める」は視線がそこに据えられて目の動きのないことを表している。これらは無くても文は成立する副詞的修

飾要素である。

2.2.5.「きちんと」「きちっと」「きっちり」の用法

1. そのかれらが異国でこうしてきちんと葬られている (五木 p. 99)
2. 人間としてきちんと受け入れられるためには、それだけでは不十分だ。(五木 p. 24)
3. とりあえず、一日きちんとご飯が食べられる生活をつづけたい、(五木 p. 169)
4. ポールのゆがみをなおし、張り綱を調節してきちんととはる。(松原 p. 108)
5. 几帳面にきちんきちんとと真夜中に起きだして昼間に寝る (内田 p. 38)
6. 日本の冷蔵庫の製氷室のようにきちっと隔離されていないので、(鳥居 p. 52)
7. 限られた幅、長さのなかで飛び上がって、きちっと降りてこなくてはならない (内田 p. 52)
8. 子ヒツジの皮袋にテレ・ヤー (バター) をきっちりつめこむ。(松原 p. 87)
9. 2000フィートで飛びなさいという指示だったら2000フィートできっちり飛べなければいけない。(内田 p. 46)
10. どんな馬鹿なことをいったのか、きっちりと証言してやる (野田 p. 18)

「きちんと」はそれが修飾する述語で表された行為に一定の基準・形式が天下り的に決められているものに使用される。1では「葬り方」、2では「人間としての受け入れ方」、3では「一日の食事」、4では「ゲルの設置法」である。「きちんと」がなくても構文上は問題ないが、これによって行為の正当性が表現されるのであるから、程度副詞とは違ってその有無によって文意は大いに異なる。5の「きちんきちんと」は「きちんとと為す行為」が繰り返し行われることを表す。商業航空機の機長であるから、乗務する航

路の発着時刻に併せて規則正しく「真夜中に起きだして昼間に寝る」日常であることを示す。

「きちっと」も「きちんと」と意味は似ているが、「行為に一定の形式が求められている」というのではなく、ある場面で「指定された枠」におさまることを表しているように見える。6の「きちっと隔離」は冷蔵庫の製氷室と冷蔵室の仕切り方の問題であり7の「きちっと降りてくる」は使用する滑走路の幅と長さが決まっているので「その枠内で」ということが「きちっと」の意味にこめられている9の「2000フィートできっちり飛ぶ」も指定された高度を「上下する」ことなく飛ぶことを意味し、10の「きっちり証言」も「過不足なく」証言することを意味する。

8は「子ヒツジの皮袋の形に合わせて隙間なく」ということであり、物理的に枠が決まっているものである。「何かに合致して外れない」というのが「きちんと」「きちっと」「きっちり」の基本的な意味であろうが、使用される場面は微妙に異なる。

2.2.6.「たっぷり」の用法

1. 昼食を自宅にもどってたっぷりとる (大久保 p. 37)
2. それに水がたっぷり溜まっている (麻生 p. 63)
3. たっぷり水浴びした棕櫚竹 (麻生 p. 36)
4. たっぷりジェット燃料を積んで雷の鋭い火柱に撃たれた時の気持 (内田 p. 63)
5. 甘辛い八丁味噌のたれをたっぷりとつけて渡してくれる。(鳥居 p. 11)
6. ぼくにたっぷりとしぶきをかけた。(野田 p. 73)
7. 透明な茶褐色の紅茶はカップにたっぷりと入っている。(鳥居 p. 67)
8. 鼻の頭に汗をかきつつ、たっぷりのカレーうどんをすっかり平らげている (五木

p. 126)

9. お椀に団子を一つ入れ、たっぷりの汁を入れて、小葱を少々散らす。(鳥居 p. 42)
「たっぷり」「たっぷり」とは量が十分であることを表す語である。1「昼食をたっぷりとする」、2「水がたっぷり溜まる」、4「ジェット燃料をたっぷり積む」、7「紅茶がたっぷりとはいっている」は容器に収まる液体等の量であり、3「たっぷり水浴びした棕櫚竹」、5「たれをたっぷりとつける」、6「たっぷりとしぶきをかける」は表面につけたり浴びたりする液体等の量である。その違いは述語動詞の意味による。今回の作品にはなかったが、目に見えない抽象的な量を表す用例(朝日新聞)もある。

#9 皮肉とユーモアをたっぷり交えて描いている。(98. 10. 5)

#10 たっぷり遊んで、ポチポチまなべばいい、という考えの子ども集団である。(98. 8. 5)

#11 色彩豊かな、“はるみ節”をたっぷりと聞かせた。(99. 4. 21)

#12 時間はたっぷりある。(98. 9. 27)

#13 たっぷりと三十一時間。佐渡トキ保護センターで二十一日、ひながユックリと卵からはい出てきた。(99. 5. 22)

#14 使用電話のごまかしやら、たっぷり一時間お茶した後の自然な振る舞い (97. 1. 8)

「たっぷり遊んで、ポチポチまなべばいい」は「たっぷり」と「ポチポチ」が対比されているので連用修飾とはいえこれを取り去ると文意が通らない。「たっぷりと三十一時間」「たっぷり一時間」は「それだけの時間を十分にかけた」という意味であり、副詞用法でも修飾先が体言である点で他の用例とは使い方が異なる。副詞用法のほかに8「たっぷりのカレーうどん」や9「たっぷりの汁」のように体言用法の「たっ

ぷりのN]がある。体言用法があるということは他の形の用例もあることを示唆する。事実、次のような述語用法の例といわれる形容動詞活用で連用形が「一に」になるものがある。また、サ変動詞化した例もある。

#15 皮肉たっぷりに不満をにじませた。(98. 10. 8)

#16 今年の夏は雨がたっぷりで、ありがたい。(98. 10. 4)

#17 たっぷりとした薄墨の雅の華やかさがあった。(文芸春秋1998、7月号)

『岩波』はこれを「副詞」とするが意味区分は二つである。「満ちあふれるほど、たくさん。十分」の例に「色気たっぷり」と「たっぷり(と)眠った」、「十分で、まだ余り・ゆとりがあるさま」の例に「たっぷりした服」がある。この例に従えば、用法は「副詞」だけではなく、「トス自」を加えてもよからう。『新明解』は「副詞」とし、用法に「一と」を記すがサ変動詞はない。六版の意味区分は五版と同じく三つであるが、意味記述の内容と例文は変更されている。

㊦必要を満たしてなお余裕がある様子。「たっぷり休養をとった」「お金はないが時間だけはたっぷりある」「いい話をたっぷり(と)聞かせてもらった」

㊧どんなに少なく見積もっても、それだけの数量は十分に有る様子。「ひととおり読むだけでたっぷり二日はかかる」「たっぷりひと汗かかされた」

㊨〔接尾語的に〕言動や態度などから、その要素が十分に感じ取られる様子。「自信たっぷりに請け合う」「ユーモアたっぷりに話す」「あきらめたと言いながら未練たっぷりの様子だ」

㊩は用法が「体言+たっぷり」なので「接尾語的に」となっているが、数量表現にはこのような形式が多い。たとえば「コーヒー一杯が千

円もする」「腕立て伏せ百回が一日の練習ノルマだ」のような例である。これらは「接尾語的」なのだろうか。

2.2.7「しっかり」の用法

1. 垂直尾翼は胴体にしっかり固定されている。(内田 p. 94)
2. 一度たたせて腹帯をしっかりとむすびなおし、もう一度すわらせる。(松原 p. 111)
3. ガクをしっかりと押さえつけて、大きな麻酔の注射を打った。(野田 p. 50)
4. 愚かな官僚主義、役人根性だけはしっかりと根を張っていて (野田 p. 31)
5. もやに包まれた松林のすがたが、しっかりと彼の脳裏に焼きつけられた (五木 p. 52)
6. 味は深く、佃煮風にしっかり煮込んであって (鳥居 p. 32)
7. どんな人がパイロットとしてしっかりやっていたのか。(内田 p. 45)
8. 船底のしっかりした大きなボートの方が好きなのだ。(野田 p. 72)
9. 和鉄のしっかりした鍵 (麻生 p. 89)

「しっかり」は組み立てや結合が緊密かつ堅固な状態であることを第一義とする。形態は「一と」となる場合もあるが、修飾する述語は用例が示す通り「固定」「結ぶ」「押さえつける」「根を張る」などで、ゆるみが無いようにそれらの行為が行われることを示す。この意味ではサ変動詞としての用例もある。それが堅固な造りであることをを表す8「しっかりしたボート」と9「しっかりした鍵」である。

抽象的な定着という意味を表すのが5「しっかりと脳裏に焼きつく」である。6の「しっかり煮込む」は確実に(長時間)煮込むことを表し、7の「しっかりやっていく」は確実に信頼のおける状態であることを表すが、これにもサ変動詞の用例(朝日新聞)があり、関係、感覚、

意識、人間、設備等が「しっかりする」で表現されている。これに関しては『新明解』が「—する」としてサ変動詞用法のあることを記すが、『岩波』は「副詞」とし、例文に「身元がしっかりしている」を挙げる。

- #15 日韓関係をしっかりしたものにしたいという大統領の強い気持の現われだろう。(97. 10. 9)
- #16 信州大学の首脳陣はしっかりした国際感覚をお持ちとみえる。(97. 4. 23)
- #17 君のしっかりした言葉遣いと熱い思いに感動しました。(97. 4. 29)
- #18 今は国の医療施設もしっかりしている。(98. 8. 1)
- #19 肺に出血はあるが、意識はしっかりしている。(98. 12. 12)
- #20 近所のお母さんは、みんなしっかりしているみたいでめいってしまう (98. 8. 5)

2.2.8「ごろごろ」「ごろりと」「ごろんと」「ころころ」の用法

1. 青色の大きな火鉢は、～、縁の下で見つけたものでした。それを鉢植えのカバーになるかもと縁の下からごろごろと引きずり出し、裏庭に適当に置いてあったというわけです。(麻生 p. 63)
2. 親グマが仔グマを胸に抱え、山の斜面を何度もゴロゴロと転がった。(野田 p. 80)
3. 山腹へむかうふみつけ道には礫石がごろごろちらばっている。(松原 p. 51)
4. 畑の石はすっかりかたづけられたわけではなく、まだごろごろのこっている。(松原 p. 120)
5. 我が家の畑には大きな南瓜がごろごろしていた。(鳥居 p. 44)
6. 石ころのごろごろしたあるきづらい道だ。(松原 p. 121)

7. しばらく本を開く気にもならず、ごろごろしていたが、(大久保 p. 198)

1は陶製の火鉢を転がしながら縁の下から引きずり出す場面を表現したものである。「ごろごろ」は転がる動きとそれに伴う音を表現するのが基本であろう。この例は動詞修飾なので「ごろごろ」は省いても文として成立する。2は「ごろごろと転がって」も音はしないであろう。この語は物の「回転」とそれに伴う「音」とを合わせ表現するが、そのうちのどちらか一方だけを表すこともある。「音」だけの場合は雷鳴に用いられている例がある。

#21 本当は同時にピカッとときてゴロゴロと鳴るのよ(『ソフィーの世界』p. 351)

3と4は「回転」も「音」もない場面で使用されている例で、修飾先が動作性の動詞ではないことが特徴となっている。「散らばっている」「残っている」等は石がそこまで転がってきたり掘り起こされたりしてその場に存在していることを表す。「南瓜」や「石ころ」など力を加えれば転がりそうな形のものがそこに数多く存在していれば、5や6のようにサ変動詞「ごろごろする」で表現することができる。この意味がさらに発展すると#22の「形のないものが数多く存在する」場面、7のように「人間が無為に過ごしている」場面でも用いられるようになる。

#22 広告代理店なんかには、それこそ『おいしい』話がごろごろしていた。(98. 11. 7)

用例では「ごろりと」と「ごろんと」は表現する対象が一つ(8)の場合と、回転が一回(9・10・11)の場合とがある。8と9は「そのまんまに白いかたまりがのっている」「あれば縁台に寝転がって」のように「ごろりと」を省くことができるが、10の「ごろりとなる」の「ごろり」とは省くことができない。それは前者の「と」が副詞の指標であるあるのに対し、動詞「なる」

に続く「と」は「に」と同様に動作や情態の変化の結果のありかを示す機能を持つからである。このような「と」を丸山(文献7、p. 184)は「助動詞ダの連用形相当のもの」でそれが受ける語が「転化する帰着点」を表すとしている。

8. そのまんまにごろりと白いかたまりがのっている。(大久保 p. 72)

9. あれば縁台にごろりと寝転がって(大久保 p. 41)

10. どこでも好きなところにごろりとなつて身軽にしばらくの眠りを楽しめる(大久保 p. 34)

11. 地べたにごろんと転がったまま身動きもせずしばらく熟睡していた(大久保 p. 34)

清音の「ころころ」は「ごろごろ」と同じく「回転」と「音」を意味するが、形も小さく音も軽いものの表現に用いられる。

12. 両手の間でころころと丸めてやや細長い楕円形にする。(鳥居 p. 17)

13. 小豆の粒餡の上へ落として、ころころ回しながら餡をまぶす。(鳥居 p. 20)

12と13は動詞「丸める」「回す」を修飾して「回転」のありようを補足修飾しているが、これらは除外しても文は成立する。#23のサ変動詞化した例では「回転」という動きから「丸い」という状態へ意味の発展が見られる。「回転」の意味から「変化」する速度の早さや回数の多さを表すようになったのが#24である。

#23 大ぶりでころころとした粒ぞろい。(NHK『今日の料理』1998. 9月)

#24 麻原被告の予言はそれについてころころ変わったので、(98. 11. 13)

「ごろごろ」も「ころころ」も「回転」とそれに伴う「音」を基本的な意味とするが、「ころころ」には「存在の多さ」を表すよう例がなく、「ごろごろ」には「丸みを帯びた形」「変化のめ

まぐるしき」を表す用例がない。

2.2.9.「ばらばら」の用法

1. だんだん各艇が離れてばらばらになってきた (野田 p. 59)
2. そうでないと機体がバラバラになってしまふ。(内田 p. 95)
3. ほんとうは泊まるホテルも違えば行動もバラバラで、(内田 p. 31)
4. いざというときに、こんなばらばらのグループが一つになって対処できるか (内田 p. 31)
5. 子供たちがばらばらととびだしてきて (松原 p. 121)

随筆における「ばらばら」の用例は5だけが副詞用法でアクセントは頭高型である。他はすべて体言用法の「～になる」「～だ」「～の N」でアクセントは尾高型である。「～になる」の「に」は変化の結果のありかを示す格助詞であり、「～だ」は述語用法、「～の N」は連体修飾の形式である。「ばらばら」には以下のような副詞用法もある。

- #25 一振りで切断された木切れがばらばらと乾いた音を立てて、土間に散乱した。(『女系家族』)
- #26 敵機は空を旋回していた。突然雨のような冷たいものがばらばらと降った。(98. 8. 18)
- #27 すき櫛で痛いほど髪をすいた。ばらばらと落ちるしらみを爪でつぶし、(『暮しの手帖』63)

「ばらばらと乾いた音を立てる」は文字通り「薪が土間に散乱する連続音」である。「冷たいものがばらばらと降る」は「粒が小さくて数が多い」とそれが降るに際して発生する「音」の両方を意味する。ところが「ばらばらと落ちるしらみ」では「粒の小さいもの(＝しらみ)」が数多く「落ちるが」、「音」はない。これらの副

詞用法では「ばらばら」は必須要素ではない。

ここから「音」の無い1～4のような述語用法の意味が派生したと考えられる。2の場合は一体であるべき「機体」が破壊されて、多数の断片になること、1・3・4は本来一まとまりになっているはずの列やグループが分離・分裂している状態を表す。5は「子供たち」が一群にはならず、「ひとりひとり個別に」という意味になっている。

3. サ変動詞化した擬態語

擬態語は「する」を従えてサ変動詞として用いられることもある。サ変動詞化している擬態語は「する」との間に「と」を介在させるものも含めて以下のように異なりで66語あった。

あっさり、うつらうつら、うようよ、うろうろ、おっとり、おろおろ、がっかり、がっしり、ギクシャク、ぐずぐず、ぐったり、ごつごつ、ごろごろ、こんもり、さっぱり、さらさら、ざらざら、しっかり、しょんぼり、すっきり、すべすべ、ずんぐり、そわそわ、どぎまぎ、どっかり、どっしり、どんより、にっこり、ぬるぬる、ねっとり、ばたばた、はっきり、びっくり、ひっそり、ひらひら、ピリピリ、ひんやり、ぶらぶら、ふわふわ、ホクホク、ほんやり、モロモロ、ゆっくり、ゆったり、よろよろ、わくわく

がらんと、カリッと、ぎょっと、ぎょろっと、じっと、しゅんと、じりりと、しれーっと、しんと、すーっと、ぞっと、とろっと、ぱりっと、ひやりと、ひやっと、ひょっと、ぬるりと、ポーっと、ほっと、むっと、

擬態語は「する」を従えてサ変動詞化するが、動詞や形容詞が語幹と活用語尾の間に係助詞「は」や「も」を介在させてサ変動詞化することを星野(文献9、pp. 21～26)が例証している。「も」や「は」が動詞と結合する場合には、

「一つの語の中に割り込んでその語を概念部分と形式用言による陳述部分とに分解し、連用形で表現された概念部分を取りたてる形で形式用言によって示される肯定、あるいは否定判断と呼応する」。つまり、一語である動詞を「V (連用形)+する」に分解し、連用形の部分が意味を、「する」が動詞としての機能を担うのである。形容詞の場合には形式用言が状態性の「ある」に変わる。その例として次の用例を挙げる。

#28 熱くなったバンちゃんは、むきになってジャンケンを続け、たまさか勝ちもしたが、やがて用意してきた十枚の銀貨を巻き上げられた。(『魚河岸物語』 p. 92)

#29 彼は自分が色を好むことを別段隠しもしなかったが(『人間にとって』p. 179)

#30 それを加代が見抜いてのことと思うと、ありがたくもあり、こわくもあった。(『魚河岸物語』 p.129)

#31 しかしこんな話はどっちみち主観的なことであって、八方に気を配って穏かな表現をしてみたところで面白くもないだろう。(『ひとり旅の楽しみ』 p. 126)

擬態語の場合にも「する」の前に係助詞「は」や「も」が入る用例がある。

1. どれがほうふら？」

「あら、子どものころ、用水路なんかにはいたでしょ」

と、いわれても、覚えていないからしかたありません。水の嵩が減ったところで、「それですよ、ほら、底のほうで、うようよしてるでしょ」

確かにうようよはしていたんですが、でも拍子抜けでした。(麻生 p. 64)

2. 念願かなっての打ち水 (最初は杓でやってたんです) でしたが、結果はいわずも

がな、波のような風なんか起きません。

がっかりはしたのですが、ただ、水遊びは楽しいですし、ま、いいか、という気分になっていました。(麻生 p. 35)

影山 (文献 8、pp. 9-11) はサ変動詞化した擬態語の意味構造に関して、「する」は意味構造の鋳型を、擬態語は具体的な意味内容を分担して受け持ち、全体としての意味構造は通常の動詞の LCS (語彙概念構造) と実質的に同じである、としている。また、サ変動詞用法のある擬態語を「擬態語動詞」としてその意味用法を AB 二つに分類し、A を 4 タイプ、B を 3 タイプに仕分けている。今後はどのような擬態語がサ変動詞化するのかということに関して実例を考察し、副詞用法とどのような意味の違いが出ているか検証する必要がある。

使役形の「させる」を伴う擬態語もある。

3. ガクが耳をピクリとさせて、その声に聞き入っている。(野田 p. 70)

4. 初めて雨に遭って驚き、短い手足をパタパタさせて慌てているガク (野田 p. 26)

「させる」を伴う擬態語は「留守番をさせる」「練習をさせる」のような使役文のヲ格要素と構文的には同じ機能を持つ。したがって、これも「副詞」とすることは出来ない。

4. 用法の固定した語

用法が固定している語もある。五木は「ひょっと」を 4 回使用しているが、その用法は以下のように全て疑問や推量を表している。新聞等でもこの語は疑問・推量を表す文末表現と呼応する用法にほぼ固定しているようだ。

1. ひょっとして、ご覧になった方は覚えているかもしれない。(p. 21)

2. ひょっとすると、等伯もこのあたりで立ち止まって宝達山を眺めたかもしれない。(p. 52)

3. ひょっとしたら退屈な場所ではないか(p. 75)

4. ひょっとしたらバクチ打ちも集まってきただろう。(p. 146)

『岩波』は「思いがけず突然なさま」の意味で「ひょっと顔を出す」を例に挙げ、『新明解』は「その事態に接したのは全くの偶然にすぎないと、とらえる様子」として「ひょっといい事を思いつく」「出先でひょっと私の耳に入りましたので」という例を挙げるが、この意味の「ひょっと」の一部は下記のように「ふと」「ふっと」に置き換えられている例が多い。

#32 ふと、その広場の西側にアサリの山が幾つも築かれているのが目に入った。
(鳥居 p. 31)

#33 “北陸の役の行者”ともいうべき泰澄のことが、ふと頭に浮かんでくる。(五木 p. 68)

「びくと」は「も」を介在させて否定の陳述と呼応し用例が示すように「びくとも～ない」の形で用法が固定している。

5. エンジンのついていないヨットは、まったくの無風状態であれば走ることができない。ヨットの上で、どんなにがんばっ

てもどうしようもない。ヨットはびくともしない。(五木 p. 179)

6. 北海道産のドッチボールのような南瓜を貰ったことがある。すべすべとして黒緑色に照り輝いていた。固くて、包丁を当ててもびくともしない。(鳥居 p. 46)

5. まとめ

擬態語は主に副詞として用いられ文の叙述内容を詳細化・具体化する働きを持つが、同じ語が体言・相体言として格要素になったり述語になったりすることがある。語の一部が構成要素となって名詞、動詞、形容詞等の派生語を作る場合もある。先に考察した語の用法をまとめると下の表ようになる。

著者や作品の種類によって擬態語の使用状況は非常に異なる。ある特定の語をある特定の用法でのみ使用する場合、使用する擬態語そのものの数が多い場合、あまり擬態語を使用しない場合など偏りが目立つ。そのため、辞書に用法や意味を記す場合には幅広くさまざまな分野から用例を収集し分析する必要がある。

表：擬態語の用法

語	副詞用法	修飾先	サ変動詞化	体言用法	述語	格要素
ずっと	○	動詞・体言				
ゆっくり	○	動詞	○	○	○	
すっかり	○	動詞・体言				
じっと	○	動詞				
きちんと	○	動詞				
たっぷり	○	動詞	○	○	○	
しっかり	○	動詞	○			
ごろごろ	○	動詞	○			
ばらばら	○	動詞		○	○	○

6. 参考文献と参考用例の出典

参考文献

1. 石橋幸太郎編『現代英語学辞典』成美堂 (1973)
2. 『岩波国語辞典 第6版』岩波書店 (2000)
3. 『新明解国語辞典 第6版』三省堂 (2004)
4. 『現代新国語辞典 改訂第3版』学研 (2002)
5. 『明鏡国語辞典』大修館書店 (2003)
6. 阿刀田稔子・星野和子『擬音語・擬態語 使い方辞典 第2版』創拓社出版 (2003)
7. 丸山直子「格助詞と格と結合価」『計量国語学』第17巻4号
8. 景山太郎『語彙概念構造研究の最前線 ― 擬態語 (オノマトペ) 動詞の意味と統語を中心に―』「シンポジウム 語彙概念構造辞書の構築と応用」公演予稿集 (2005)
9. 星野和子『現代語における「モ」の用法』東京女子大学日本文学科 (1986)

参考用例の出典

1. 朝日新聞 (1997～1999)
2. 『文芸春秋』(1998) 7月号
3. 池田加代子訳『ソフィーの世界』NHK 出版
4. 山崎豊子『女系家族』新潮文庫
5. 『暮らしの手帖』63
6. 森田誠吾『魚河岸物語』新潮社 (1985)
7. 高橋和巳『人間にとって』新潮文庫
8. 高坂知英『ひとり旅の楽しみ』中公文庫